ネット社会という船に乗って 57

「わかる」と言われると傷ついてしまうことがある

文 佐渡島庸平 text by Yohei Sadoshima

何かを表現しようとしている時、その人は、わかってほしいから表現を試みる。しかし、その表現を受け取った人は、「わかって」はいけない。「わかって」しまうと、表現した人は救われない。

何について、僕が語ろうとしているのかというと、地震で被害に遭った人たちのことだ。家族を亡くして、悲嘆に暮れている人たちがいる。マスコミは、その人たちを発見し、その人たちの悲しみをニュースとして伝える。どのようにして、家族を失ったのか。そして、どのようにそのことと向き合ったのか。お葬式をあげているところにまでもカメラが入り込み、その悲しみを日本中に伝える。たくさんの人がそのニュースを見て悲しむ。泣く人もいるだろう。たくさんの人が共感する。その人の悲しみを「わかった」と感じる。でも、その人は1ミリも救われない。「わかった」人がたくさんいればいるほど、その人は救われない。なぜなら、その人自身は、自分の悲しみ、喪失がどんなものかをまだわかっていないからだ。自分にもわかってない感情を、他者に先に「わかられて」しまう。個別の、自分だけの唯一無二の感情のはずが、普遍的なよくある悲しみとして、処理されてしまう。自分の感情が、ニュースの一つとして、世間に消費されていってしまう。

「わかられて、たまるものか」

世間が示す同情に、より深い孤独を感じてしまうだろう。他者の手助けを受け取れない自分を、器の小さい人間だと責めてしまうだろう。インターネットによって情報が早く多くの人に届くのはいいことだ。情報は消費されて、新しい情報が生み出される。それもいいことだろう。しかし、感情は必ずしも早く伝わればいいわけではない。ゆっくりとでなければ、伝わることがない感情が存在する。

創作とは、感情を扱う仕事だ。ゆっくりとでなければ伝わらない感情を物語にする。時間をかけて感情を受け取る。他者の感情をわかり合えないものとして扱う。それが今求められていることで、そのようなことを実現する物語を、僕は編集者として生み出したいと思っている。

Profile
株式会社コルク 代表取締役
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』(三田紀房)、『働きマン』(安野モヨコ)、『宇宙兄弟』(小山宙哉)などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形の先にあるインターネット時代のエンターテイメントのモデル構築を目指している。